
子羊は僕で、あの子は狼

稲垣 薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子羊は僕で、あの子は狼

【Nコード】

N3774Y

【作者名】

稲垣 薫

【あらすじ】

草食系男子、肉食系女子が当たり前の時代になった日本の話。
男らしい男を目指す宙太そいつの物語。今ではない、女性が強くなった未来の日本の話です。

男女の感性が、特に性的なものにおいて、女性が強く、男性は弱くなっています。

プロローグ

のんびりした雰囲気の島で育った宙太そらたは、高校進学を期に東京の隣県にある海辺の街に引っ越してきた。

古い日本の気質が残る島とは違い、新しい街は女性が強い、今時の日本そのままだ。

宙太そらたは宙太そらたが中学のときに島から海辺の街に引っ越していた親戚の家に下宿し、新しい生活にわくわくと期待する。

昔見た古い映画に出てきた男くさい男にあこがれる宙太そらた。

宙太そらたはまだ知らない、女性の多くは宙太そらたをおいしそうな獲物のように見ていることを。

女性は強くなったのではなく、強くなりすぎたことを。

第1話 初めての街、懐かしい顔

「うーん、やっと着いた」

季節はまだ肌寒い3月の終わりごろ。故郷の島を出て船に乗り、電車を乗り継いで宙太は新しい街に降り立った。

ここは東京の隣県にある海辺の街だ。藤倉というこの街は駅前を少し離れると住宅地が広がる典型的なベッタタウンで宙太は高校進学を機に親戚の家に下宿させてもらうことになっている。

「宙太〜こつちだよ」

待ち合わせの場所には既に、いとこで幼馴染みでもある向日葵が、その名のとおり陽の光の中で満面の笑みを咲かせている。肩にかかるセミロングの黒髪、黒目がちの大きな目は若干の幼い印象を与えるが同級生だ。

「ひさしぶり、向日葵。待たせちゃったかな」

懐かしい向日葵の笑顔に、つい顔がほころぶ。幼い頃から見慣れた、なんとというか安心感というやつなのだろう。

「そんなこと無いよ、たいして待ってない。ひさしぶりだね、宙太。ここまで来るのに疲れたでしょ」

声をかけられる前、遠目に見た向日葵は、そわそわと落ち着かない様子だったがあまり待たせてはいないようだ。なんだろう、トイレを我慢しているのかもしれない。いいのかな?と思いつつ、しば

らく雑談を続け、気になっていたことを聞いてみた。

「で、何で制服を着ているの?」

「もう!、宙太に見せようと思って、着て来たんだよ。びっくりした顔してないで、喜ばなさい」

「わかった、ごめんごめん。うん、とっても似合ってる、かわいいよ向日葵」

男子たるもの褒める時はしっかり褒めなくてはならない。そして実際に良く似合っている。

向日葵は自分で要求しておいて、ストレートな宙太の言葉にそっぽを向いている。

この反応は、もう一声足りなかったのかも知れない、何て言えばいいんだ?似合っているじゃ駄目なのか?具体的に言うべきだったのか?

褒め足り無かったのかと宙太が失敗した気になっていると、照れからすぐに復活した向日葵は言う。

「とりあえず、うちに行こう。お姉ちゃん達待ってるから」

「分かった。その前に向日葵、これから三年間よろしく」

向日葵に近づき、その目を覗き込むように改まって言う笑顔の宙太に、向日葵は動揺する。

(「近い、近いよ宙太。かわいい顔してるんだから、気をつけなさいよ」)

久し振りの再会なのだ、あまり背は伸びていないが、日に焼けた健康的な宙太の笑顔は女子には目の毒なのだ。さらさらの癖の無い黒髪、白い歯も爽やかさに拍車を掛ける。

「「こちらこそよろしくね、宙太」

なんとか動揺を押し隠しつつ笑顔を作るが。向日葵は内心では、昔はこんなこと気にならなかったのにどうしたんだろうと思った。

宙太は何か変わったのだろうか？

それとも変わったのは向日葵なのだろうか？

一方、宙太は久し振りに会う向日葵に、背の高さで勝っている事が嬉しくて、向日葵の動揺には気が付かなかった。僅差ではあるが、男らしい男を目指す宙太には大事なことだったのだ。

第2話 山吹家

駅から15分ほど歩いたところに、宙太そらたの新しい家、山吹家はあった。

宙太そらたの父の妹、いずみが嫁いだ家だ。家族構成は父の大地、母のいずみ、長女の蜜柑みかん、次女の向日葵ひまわり、三女の李すももの5人家族。大地は長期出張が多く不在がちで、いずみも仕事をしていて、たまに夜遅くなる。

閑静な住宅地にあって少し大きめの家屋と敷地。宙太そらたが小学生のときに大地が建て引越した。それまでは山吹家も島で宙太そらたの家の隣に住んでいた。

「ただいま、宙太そらた連れて来たよ」

向日葵ひまわりが玄関を開けて、家の奥に向かって呼びかける。

「宙太そらたお兄様、お久しぶりです。」

すぐに李すがやってきた。細い髪質の腰まである黒い髪は、艶があり頭が小さく見える。目元は釣り気味の整った顔立ちで、既に未来の美貌の片鱗を覗かせている。将来のクールビューティーは間違い無しだと思われる。

黒髪に思えた向日葵ひまわりも少し染めているんだなと分かる、それほどにきれいな黒髪だ。全体的にスレンダーな印象で背もあまり高くない、白い肌と相まってお人形さんのようにも見える。

李すは今年で中学3年生、すこし離れた場所に建つ名門私立に通い、生徒会役員を務めている。その為か、春休みなのに制服を着ている、凝ったつくりのめずらしい白地の冬服だ。

「李ちゃん、久しぶり。これからお世話になるよ。」

そしてできる男を目指す宙太は先の失敗を取り返すべく、こつ続けた。

「とても大人っぽくなったね。制服も良く似合ってるよ」

宙太としては服装も褒め成長も褒め、具体的に“制服”も入れ、よくやった自分と思っていると。

「ありがとうございます」

と、そっけなく返された。怒っては居ない、不愉快そうではない、しかし嬉しそうではない。またしても失敗かと自分の男子力にがっかりしているときにそれは起きた。

「ね〜ね〜李ちゃん、これどっちがいいかな。2人とも制服着ちゃってるし。私、何着ればいいか迷っちゃうよ・・・」

廊下の奥のほうからバスタオルを巻いただけの蜜柑がやってきた。金に近い明るい色に染めた、やや短い髪が濡れて、上気した顔に貼り付き、大きな目、垂れた様な甘い目元と相まって色っぽい。極め付けにピンクとライムグリーンの下着を両手に持っている。

「あら、宙太君いらっしやい。早かったのね」

宙太から見れば裸同然の格好なのを気にした風も無く蜜柑は言う。

「疲れたでしょう、さあ上がって上がって」

と続け。スリッパを用意するために、こちらに来てしまった。

「うわっ」

宙太は小声でうめく。湯上りの火照った胸元は大きめ。蜜柑が何事も無いように話を続けるので、落ち着かない気分を押し隠し、宙太も挨拶を続ける。

「お久しぶりです、蜜柑姉さん。これから三年間お世話になります」

宙太としてはがんばった。目を逸らさず、言い切った。蜜柑はその宙太の様子に、にやりとすると。

「硬いわねえ」。まあいいわ。それで宙太君はどっちがいいと思う？」

さらに一步近づき宙太の目の前にピンクとライムグリーンのそれを突き出す。玄関の段差もあり胸元もまさに覗き込むような状態になっている。

近い、近いよ。お、おっぱい近いよ。蜜柑姉ちゃん、だめだよ。男子たるもの、気の聞いたせりふを言わなくてはとあせる。しかし、心の中では蜜柑の呼び方も昔に戻ってしまふ。だが近い。そうか、山が高いということは、それだけ谷も深いんだな。頬に感じる湯気の温もりにさらにあせる。あわあわあわと。

「ちよ、ちよつと散歩に。」

宙太は回れ右をして逃げ出した。

第3話 姉妹会議

「お姉ちゃん。やっぱり宙太には刺激が強すぎたみたいだよ」

玄関から右手にある居間に移動して、向日葵は言った。

山吹家は父親が長期出張でいないことが多く、普段は女所帯であるせいか、風呂上りをバスタオルですごすのは当たり前なのだ。そのため、事前に、そういうことは気をつけようと話し合ったばかりだったが。

「ん、もう来ているとは思ってなくてさ。これから気をつける様にするわ。」

しれっとした態度で、あまり気にした風も無く蜜柑は言う。

「でも、蜜柑お姉さま。最後のほうはわざとですね。にやつとしたの見逃しませんよ」

「だって、楽しくなっちゃって。すぐに赤くなるし。その後もがんばってるのがみえみえで可愛くなっちゃってね」

溜息をつく向日葵を気にせず、蜜柑は続ける。

「でもさ、宙太君かっこよくなったね。昔からの可愛い感じもまだ残っていて、すごく好みのタイプになったよ」

「え？本気なお姉ちゃん？」

恋愛ごとに疎い向日葵は、宙太の出て行った玄関の方を考え込むように見つめる蜜柑に驚いて言った。

「まーだ。まだ本気じゃないよ。昔から宙太君には向日葵ちゃんが
お似合いだと思っていたしね。でも、からかう位はいいでしょ？」
「え？私に言わないでよ。何で私の許可がいるのよ」
「そうね。今はまだ何も感じないのね向日葵ちゃんは」

姉が返す質問に不思議そうな表情を浮かべ答える向日葵。納得す
る蜜柑。そこにいままで黙っていた李が言う。

「いけません蜜柑お姉様。私は昔から宙太お兄様と決めていました。
誘惑するような真似は慎んでください。」

普段、姉達のことには意見することは無いのだが、これは李にとつて譲れないことらしい。過去に数度だけ起こった、李にとつて譲れないこと、いわゆる李ルールによる姉妹喧嘩が思い起こされる。
「李ちゃんの気持ちも良く分かったわ。それに、これは私達だけが決める事では無いしね。だから、これから宙太君を含めて家族になるんだし仲良く、楽しく、助け合って暮らしましょう」

真剣な者、真剣でない者、良く分からない者、三者三様の態度であるが蜜柑が姉らしいところを見せて言ったが、最後は蜜柑らしく言い切った。

「でも、からかうのは止めないけどね」

第4話 宙太の目指す男

宙太そらたは山吹家から逃げ出し、無駄むだにうろつろと歩き回りながら、あの場面で男らしい行動とはなんだろうと考えていた。気の聞いた一言でも言えればよかったのか、さり気なく蜜柑みかんに注意すればよかったのか。

顔を赤くしている時点で、さり気なくは無くなるのだが、自分の顔が赤くなっていることに気づいていない宙太そらたは、次は上着を掛けてあげようと見当違いに決心していた。

さあ、蜜柑みかんこれを着なさい。よし、かっこいい。肩に上着を着せ掛けた手で、そのまま肩を抱き寄せ・

想像上では確かに男らしいが、現実世界では幼い頃からすっかり調教済みの宙太そらたは蜜柑みかんに頭が上がらない、呼び捨てにできるはずも無い。飛べと言われれば、何で？とは、聞かず、何処まで？と聞いてしまいそうだ。

無駄むだにコンビニに寄り、お茶のペットボトルを買った宙太そらたは散歩という名前の逃避行から家に戻った。

「ただいま」

動揺の大きさを示すように、ずっと肩に掛けていた大きなポスطنバックを玄関に下ろしながら宙太そらたは言った。

「あ、おかえり。さあ上がって上がって」

「ひゃい、えっと、お茶買ってきたよ」

蜜柑みかんがすぐに現れたことに驚きつつ、お茶の入った袋を渡す。

「そう、ありがと。わざわざ買いに行ってくれたのね」
「ええっと、散歩のついでだから」

蜜柑相手に見栄を張ることも無いのだが、気を使われているようなので、とりあえず乗っかってしまおう。すでに着替えている蜜柑は白のやわらかそうな印象のロングスカートに明るいオレンジのセーターを着ている。胸元は・・開いている。うれしいが、ちょっとだけ残念だ。

居間に移り、4人でお互いの家族の近況報告も兼ねた雑談をして、くつろぐ。大地はやはり長期の出張中で、しばらく帰らないらしい。話すうちに、以前に比べ成長した三姉妹に抱いた緊張感も消えていた。悪戯な蜜柑、のんびり明るい向日葵、物静かな李。女性らしく成長したものの、素の彼女達はあまり変わっていない。

「宙太の荷物はもう開けて整理しておいたわよ。」

向日葵の言葉に、もしものために、下着などはポストンバッグに入れて自分で持ってきてきて正解だったと宙太は安堵した。

「そのポストンバッグの方も手伝おうか？」

蜜柑はしつかりチェック済みのようである。

手伝ってくれた三姉妹に礼を言い。残りは自分でやるからと、これから自分の部屋になる部屋に案内してもらった。三姉妹が付いて来たがお帰り願った。

宙太の部屋は既に片付いており、ポストンバッグの中身をたんに移すだけで、ほぼ引越しは終わった。エロ本などという無粋なものを持っていない。ポストンバッグに入れてきたノートPCは別だが。

仕上げに敬愛する文大さんのポスターを壁に貼り、部屋は宙太そらたの部屋となった。

第5話 役割分担

以前、日本は男性上位だと言われていたらしい。その頃の日本では、異性に積極的な女性は肉食系女子などと言われていたという。

現在の日本では全般的に女性は肉食系、男性は草食系であるのが一般的で、主婦より主夫の方が多い位である。

その進行の原因は諸説あるが、戦争などが無く治安が良いこと、男性の出生率の低下、無害な避妊と性感染症予防の薬、力の強い男性より人間関係に敏感な女性に向いている仕事が増えていることが挙げられている。

それでも当初、その変化は人口減と男性出生率の低下による、やむを得ない変化であった。

宙太そじたの生まれ育った島は、いまだ昔の日本そのままの雰囲気があった。島は漁業が盛んで、力の強い男が海に出て、女性は家に残り漁の用意や家事に精を出す。宙太そじた自身はそんな、昔の男性が持つ常識を持っている。

現代の男性が持つ常識も理解してはいるが、今の、特に若い世代には絶滅してしまった感のある、男らしい男に憧れる変わった少年なのである。

その夜、山吹家では仕事から帰宅したいはずみを交え宙太そじたの歓迎会をした後、家事の役割分担を決めた。

蜜柑みかんは家の掃除、向日葵ひまわりは食事全般、李すももは洗濯、宙太そじたは家の外の掃除だ。宙太そじたの仕事は以前ははずみをやっていた仕事で、今回から宙太そじたに任されることになった。

三姉妹の分担は以前から同じに決まった。大学生の蜜柑みかんは授業の関係で曜日によって家に居る時間が不規則、離れた学校に通う李すももは朝は早く、生徒会の仕事の為に夜も遅くなりやすい。

一番安定して時間の取れるのは向日葵で、2年ほど前から夕食だけは担当していた。いずみの仕事の関係で、夕食は遅くなるか出勤かお弁当が多くなって、向日葵が私がやると言い出したのだ。

宙太の担当である外の掃除は、以前、仕事をしているいずみが担当してただけあって、あまりすることが無い。毎日やることとはいえ、朝軽く家の前を掃くくらいだ。そのため、三姉妹のフオローもお願いされている。

その後、風呂上りの宙太は向日葵と一緒に日用品や学園に通うのに必要な、買い物リストを作っていた。男物のシャンプー、文房具、上履きなどである。

なぜか李も同席しており、宙太のことをじっと観察している。

そこにお風呂から出たばかりの蜜柑がやってきて、冷蔵庫からオレンジジュースを取り出しながら言う。

「宙太君、ずいぶんセクシーな服装してるのね。寝るときはいつもその格好なの？」

宙太の服装はいつも寝る時に着ている薄手の白い長袖のTシャツに綿のパンツで取り立てて変わった格好のつもりは無かった。

しかし、今まで暮らしていた島ならいざ知らず、ここでは下が透けてしまうようなシャツ一枚は扇情的と言われてしまうのだ。男性は2枚は着るのが半ばマナーのようになってる。

「透けちゃってはつきりと見えちゃってるよ、乳首。李ちゃんにじっと見られているのが半ばマナーのようになってるの？」

宙太が李の方を見やると李はすっと目を逸らした。

「うわっ!?!」

宙太はようやく、なぜ李がずっとこの場に居るのかを理解した。目を逸らしたことで真偽のほどは確定だろう。しかも一度は目を逸らしたが既に、また見られている。

向日葵も、よく見てみると顔が赤い。話をしても目が合わない。ので不思議に思っていたが、向日葵も気が付いていたのだろう。どうやら向日葵はむっつりすけべのようだ。

宙太は恥ずかしくなり、猫背気味に腕を組み、胸元を隠した。うかつだった、島ではセーフだけど、こっちはアウトなのか。でもこれ、男らしくないよ。。。

宙太としては、胸を張り、堂々としていたのだが、こうもあからさまに観察されてしまうと、どうしても恥ずかしさが先にたつ。

「ちょっと、李ちゃん。そんなにじろじろ見ないでくれる?」

「でも、宙太お兄様、減るものでもないし良いではありませんか」「減るの。なぜだか大事なものが減っていく気がするの」

「けち」

最後には李に、つんとされてしまう。

宙太は男らしい男への、道のりの遠さに、しばし呆然としてしまった。

第6話 茜

その日の昼ごろ、山吹家には一人のお客さんがやってきていた。来客の予定を聞いていなかった宙太は、自室から下の階に降りたところで、玄関に入ってきた茜と、出迎えた向日葵に行くわした。

蘇芳茜は、向日葵の昔からの親友で、高校も同じ藤倉学園に通う同級生だ。ジーンズに白いパーカー、明るいオレンジのダウンのベストという活発的な服装だ。

長めの髪は黒というよりはこげ茶に近く、ポニーテールにしているので、かわいい耳が良く見える。宙太はポニーテールが大好きで、特に耳とうなじの後れ毛が好物なのだ。

「こんにちは」

どうみても、セールの人には見えなかったので誰かの知人だろうと思ひ、宙太は声を掛けた。

宙太はすっかり油断した灰色のスエットの上下という格好だったので、余り他人と会いたいとは思えなかったが、家の構造上、階段をおりきると目の前は玄関なのだ。

「あ、こんにちは。う~~~~ん、なるほど。あなたが向日葵の宙太君？」

茜はじつと観察するような視線を宙太に向けながら不穏な言葉を発した。隣では向日葵が少し慌てている。向日葵は慌てると手が動くので分かりやすい。

「いや、向日葵のものになったつもりは無いけど・・・」

「ああ、ごめん。向日葵の幼馴染の宙太君って言いたかったの。私言葉の途中を省略する癖があつて、良く誤解されちゃうの」

「ああ、そういうことなんだね。俺は大空宙太、向日葵とは同じ年でいここだよ」

茜の態度と向日葵と仲が良さそうな様子から、同級生と判断して気軽に言い返した。

茜のなるほどという言葉が気になるが、明るい元気な女の子のようで、体を動かすのが好きな雰囲気がある。それに、かわいい。

「ふむ、ふむ」

靴を脱ぎ家上がった茜はさらに近づき、観察する様子を隠そうともせず、あからさまに興味津津だ。宙太の顔を右から、左からと順に覗き込み、宙太の頬を突つつこうとして向日葵に伸ばした指をはたかれている。

近づいて来たので分かったのだが、背は宙太より大分低い、150cm位しかないだろう。挙動に幼さを感じるが、程よく実り、服の胸元を押し上げているそれは、柑橘系の香りとともに、宙太に女性を意識させる。

「ほら、茜。宙太、困ってるから、部屋行くよ。じゃあね、宙太。この子は蘇芳茜って名前で、私の昔からの友達よ」

女子高生に睨まれた男子高校生になって固まっていると、向日葵は茜の背中を押して階段を上っていった。「え〜もうちょっと良いじゃない」等、聞こえるが強引に押し切られてしまったようだ。

「え〜っと、何かしたかな俺？」

自分としてはごく普通に接したつもりだったが、興味をもたれた様子は、鈍感な宙太にも良く分かった。

階下に降りた用事も忘れ、しばらく自己採点にふけり、ぼんやりと玄関に立ち尽くしてしまった。

「ねーねー、向日葵。何あの可愛い生き物？」

場所を向日葵の部屋に移しても、茜は宙太に興味津々なようだ。

今日は新しい制服のスカートの丈をどのくらいにするか、2人で決めようとやってきたのだが、それは後回しになった。

「宙太をペットみたいに言わないの」

「宙太君いいね、気に入ったよ。昔から向日葵の話に出て来てたけど、実物があんなに可愛いとは思わなかったよ。写真無いの？写真頂戴。一緒に暮らしてるんだよね。いいな、向日葵。うらやましいな。」

向日葵の注意を聞きもせず李は宙太の話題を続けている。茜は宙太の話を聞きたがり。宙太が山吹家に来たときの様子が暴露されてしまった。

「はあ、可愛いな宙太君。赤くなったところ見てみたかったな」

茜の言葉に向日葵は宙太の身の危険を感じる。今までも茜はかっこいい男の子に目が無く、この人がいい、あの人がいいと良く騒いでいたが、今回は少し本気のようだ。

少し茜の熱を冷まさなくてはと思い、幼い宙太の格好良いとはい

えない話題を提供することにした。

「宙太そらたは昔から映画とかの影響を受けやすく、古い映画で見た男っぽい俳優さんにあこがれて、顔をしかめて人を待ち伏せするシーンを雨の中で一人で練習して風邪を引いたり。酔っ払ってパンチを繰り出す、拳法の真似をしたりしてたよ。それに男らしい男になるって、自分のことをわかっていいだしたり。男らしい男になるって言うのは、今でも言っているけどね」

向日葵ひまわしとしては宙太そらたの印象を若干修正しようとした話題だったが、

「なにそれ、かわいいね。そんな宙太君そらたもいいな」

無駄だったようだ。

「そつだ向日葵ひまわし、お茶を淹れに行こう。一緒に行こう。すぐ行こう。お客さんにはお茶を出すものだよ」

お客さんにお茶を出すのはうなづけるが、お客さん本人が張り切って用意するものじゃないと思いつつ、急ぐ茜あかねに引つ張り出されるようにして部屋を出る。階段を降り、宙太そらたを探しながらキッチンに向かうが、すでに宙太そらたは居なかった。

その頃、宙太そらたはようやく用事を思い出し、故郷の島に手紙を出すため郵便ポストを探して家を出た後だった。

「いないか……。宙太君そらたと同じクラスになると良いな。少し私のこと意識して欲しいから宙君そらって呼ぶことにしよう。いいよね向日葵ひまわし？」

「え？いいんじゃない？」

なぜ自分に聞くのか分からないまま、向日葵^{ひまわり}は答えた。最近、同じ様なことを誰かに聞かれた気がする。

第7話 エイプリルフル

ん、なんかいい匂いがする。

その日、宙太は起き抜けのぼんやりした頭でそんなことを考えていた。朝はまだ肌寒い、一晩掛けて自身の体温にマッチした布団は既に宙太の一部だ。

あゝ、李ちゃんの顔が近づいてきて、まるでキスをするように・・・

「うわっ！」

あわてて体を起こす、寝ぼけている場合ではない、尚も迫る李の肩に手をやり距離をとる。

「ちよつと李ちゃん、どうしたの?」

「宙太お兄様、おはようございます。どうしたのですか?そんなに大声を出して」

宙太の慌てぶりは気にせず、パジャマにカーディガンを羽織った李は、のんびり挨拶をする。

「だって李ちゃん、いまキスしようとしたよね?」

貞操の危機だ、それは大声も出るよと宙太は思った。

「いやですね、お兄様。今日は4月1日、エイプリルフルですよ。ちよつとした冗談です。それより朝ご飯ができていますから、早く

降りてきてくださいね。」

それだけを言い残すと、李は部屋を出て行ってしまった。宙太一人になった後につぶやく。

「冗談にしては肩を抑えたのに、ぐいぐい迫った来てたよ李ちゃん・」

宙太としてはエイプリルフルは他愛も無いうそを友人につき、互いに笑い合う、そんな日なのだがこちらでは違うらしい。それに時間はまだ5時半で、さすがに朝食はできていないだろう。

こっちのうそが李ちゃんの冗談なのかな？と、心の中でつぶやき。今度は声に出してつぶやく。

「それにしても李ちゃん、良い匂いだったな。肩も柔らかくて、あのままだったらキスしてたのかな・・・」

あれが女の子の匂いなのかな、花のようなふんわり香る匂い。シャンプーなのかな？体の匂いなのかな？

覆いかぶさられたとき、首筋をくすぐった髪の毛の柔らかさも女の子、手に残る肩の感触も、華奢な外見からは想像していなかった弾力を残している。

「キスしてたかもね」

「ひゃう」

一人になったと思ったところで、突然、蜜柑に声を掛けられ奇声を上げてしまう。ベッドの壁側、李が居たのとは逆のサイドに、布団に入り込んだ蜜柑がいた。

驚いた宙太がさらに大声を出そうと息を吸い込んだとき、それを

察した蜜柑は、宙太の口を手でふさぎ、腰に足を絡め、後ろから抱きつくようにして、布団の中に引き釣り込んでから言った。

「しーしー、静かに。お母さん起きちゃうでしょ。疲れているんだから寝かせてあげなさい」

「むぐぐ、むぐぐむぐぐ、むぐぐぐぐぐ」

（「それは、蜜柑姉さんが、悪いんでしょ」）

宙太は口を塞がれながらも抗議するが、今は布団の中で後ろから絡め取られている状態だ。驚きからさめた今は、蜜柑の温かく柔らかい体が気になってしょうがない。蜜柑の体温も宙太の布団の温度とマッチしている。むしろ、宙太の布団が蜜柑の体温をその一部としているのだ。

蜜柑姉さんはどれだけ長い時間、一緒に居たんだろう。

「暴れない？叫ばない？約束できるなら頷きなさい」

なぜだか高圧的な蜜柑の言葉に宙太は、昔からあまり俺の言うことと聞いてくれたこと無いよな、と思いながらも頷いた。

「まったく、朝早くから大きな声出しちゃダメでしょ、ご近所迷惑なんだから」

ようやく宙太の口から手を退け、蜜柑は年上ぶった態度でささやく。口を塞いでいた手を退けただけなので、後ろから抱きつき、宙太の耳元に口を寄せる姿勢は変わらずだ。

「えっと、ごめんなさい？」

流石に調教済みの宙太も理不尽さに気付き、疑問系だ。その一方、

心の中では別のことを考えてしまっていた。

これは、なんの匂いだろう。李ちゃんの花のような匂いじゃない。蜜柑姉さんの匂いなのかな？汗をかいたような、でもイヤな匂いじゃない。むしろ好きな匂いかも。あと、む、胸が当たってるよ。それどころか押し付けられているよ蜜柑姉さん。あと、耳に息がかかる。ん？うわ、耳の後ろの匂いを嗅がれている。へ、変態だ。変態が居る。

布団の中にもり温まった、抵抗する宙太を押さえつけるために掻いた、蜜柑の汗の匂いが宙太をうっとりさせせる。

「じゃ、エイプリルフルお終い、お休みなさい宙太君」

蜜柑はそれだけ言うと、さっさと部屋を出て行ってしまった。

宙太は朝一番の青少年の事情に悩ませられながら、宙太の腰に足を絡ませていた蜜柑には気が付かれたよなと思い、がっくりしていた。

「眠れるわけ無いよ蜜柑姉さん・・・」

第8話 初登校

宙太と向日葵が通う県立藤倉学園は山吹家のある藤倉駅から2つ離れた駅、県立藤倉学園前駅から徒歩15分ほどのところにある。

県立藤倉学園駅は海辺にあるのだが学園自体は山側で山の頂上付近にあり、毎朝ハードな山登りを学園生に強いている。

「「いつてつきまゝす」」

宙太と向日葵は、家に残りのんびり朝ご飯を食べている蜜柑に声を掛け家を出る。いずみと李はすでに慌しく出掛けたあとだ。

宙太はガクランで、向日葵はセーラー服。色も伝統的な黒と紺だ。宙太はガクランが着たくて、受験の際に、山吹家から通えるガクランの高校をさがして、藤倉学園に決めた。学力的には宙太の成績より上だったのだが、がんばって勉強したのだ。主にガクランのために。

向日葵は家から近いこともあり、また学力的に藤倉学園がちょうど良かったので決めた。宙太と一緒にになったのは偶然だが、どうせなら一緒に通いたいと思い、がんばる宙太を応援してきた。

真新しい制服に身を包んだ2人は並んで藤倉駅に向かいながら話をしていた。

「藤学は部活に所属する人が多いんだって、お姉ちゃんが言ったよ。宙太は何かやりたいこととか無いの？」

「うーん、俺は特に無いな。向日葵はどこかの部活に入るの?」
「料理に関する部活なら面白そうかなと思うけど、実際に毎日やってるし、どうしようかなって思ってるんだよね」
「いいんじゃない?新しいレパートリーとか増えると思うよ。それに、向日葵が部活するなら俺も協力するよ」
「うん、ありがと。私、ケーキとか作れるようになりたいんだよね。普段の料理は死活問題だったからやってきたけど、最近余裕出てきたから」

向日葵は少し昔を思い出しながら苦笑いをした。向日葵が料理を担当することを言い出したとき、母のいずみは仕事が忙しく、5日続けてスーパーで買ってきたお弁当だったことがあり、それがいやで仕方なかったのだ。

もともと、プラスチックのトレーが箸に当たる感じと、弁当のお米の食感が余り好きではなかったのが、それをきっかけに大嫌いになってしまった。今でも、売られているおにぎりのお米は好きなのに、何故かお弁当のご飯は好きではないので変だなと思っている。

話している内に駅も近づき、向日葵は宙太に伝えなくてはいけないことがあることに気が付いた。

「そうだ、宙太。ラッシュアワーに電車に乗るのは初めて?」

「うん。もちろん初めてだよ。島には電車は通ってないからね。東京見物とかに行ったときも、混むような時間には電車に乗らなかったよ」

やはり向日葵の思った通りだった。宙太は少しわくわくしているようだ。満員電車はお祭りではないのに。

「良く聞いて、宙太。一人でラッシュの時間に電車に乗るときは気

をつけてね。出るから」

「出るって何が？幽霊が出るみたいな言い方やめてよ」

「出るのは痴女だよ」

「えー、痴女？痴女なんて別に怖くないよ」

真剣な向日葵の様子に宙太は取り合わない。力自体は自分の方が強いので、特に怖がる必要も無いと思っている。

「いいの、いいから気をつけなさい。宙太は絶対狙われるよ」

「わかったよ、向日葵」

とりあえず納得して頷くことにしたが、宙太はやはり気にしていなかった。捕まえて警察に突き出してやる、くらいに思っていた。

あと、“絶対”って何だよ。

駅に着きホームで電車を待つ。当たり前だが宙太は電車には何度も乗ったことがあるので迷うことも無い。しかしラッシュアワー特有の緊迫感と隣の人との距離が近いことは初心者の宙太を圧迫する。

ホームに宙太達が乗る、上り電車がやってきた。それに乗り込み、むぎゅ、むぎゅと人込みに揉まれながら、宙太は向日葵に聞いてみた。

「ねえ、向日葵。青っぱい感じの車両があっただけど、あれは何？」

宙太達が乗り込んだのとは違う車両に他とは違う車両があった。特別感が漂っていたし、何より空いていた。みんな、あつちに乗れば良いのに。

「あれは男性専用車両だよ。痴女防止のための」
「・・・そっか」

そんな特別はいやだな。宙太そらたが思うより都会は厳しいらしい。周りの人間にぎゅうぎゅうと押されながら宙太そらたのわくわくした気持ちもしぼんでいった。

自分の足だけで直立できない、そんな落ち着かない時間を過ごし、宙太そらたは超満員の車内から吐き出され、藤倉学園駅に降りた。毎朝のことだが2駅だけの短い時間だけだ、世の中の社会人の皆さんのすごさに頭が下がる。

これは自分の中の何かが鍛えられそうだ。

それにより今は持っていない“渋さ”が得られるに違いない。

この混雑から得られるのは“諦めの気持ち”だけだが、それを知らない宙太そらたは満員電車の通学はスポーツか何かだと思い込むことにした。

藤倉学園駅はその名の通り、藤倉学園しか近くに大きな施設が無いので藤倉学園駅なのだった。ホームに降りた人はほぼ藤学の生徒でホームから線路をはさみ片側1車線の道路の向こうはすぐに海になっている。

電車が行き過ぎた後、急に開けた海の景色をみて、宙太そらたは元気が出てきた。春としては少し強めの日差しが波間を白く照り返し、故郷とは違う潮の香りを暖めている。

ちよっと人込みに疲れたな、あっちに行って休みたいな、そんな風に思ってしまう。

駅の近くの海辺には何もお店らしいものは無いが、100mほど離れた場所に白いお店らしきものが見える。あれは何のお店だろう。今度行ってみよう。

「ねえ、宙太そいた。そろそろいくよ」

宙太そいたが海に見入っているのを、待っていてくれた向日葵ひまわりが声を掛ける。

「まだ、山登りがあるからね」

「山登りって、向日葵ひまわりも大げさだな」

残すは校門までの坂道だけ、満員電車も体験した後での、その大げさな向日葵ひまわりの言葉に笑った。

「真冬の寒い時期になるとたまに地面が凍結して、登るためにロープが張られるんだよ」

“スポーツか何か”は、まだ終わっていないかったらしい。

第9話 級友たち

「今日は茜も居るはずだよ。茜は中学の頃からテニスをしていて、高校でも部活に入るって言ってたから、待ち合わせも今日だけだと思っけどね」

向日葵が改札を出た後、少し周りを見渡しながら言った。そこで茜のほうに先に宙太達を見つけたようだ。

「向日葵〜、宙くん」

茜が小走りに近づいてきて、3人で学園に向かう。走るたびに揺れるポニーテールは今日も健在だ。小柄なくせに大きく揺れる胸も、やはり目を引き付け健在だ。

これは大きいな。それに呼び方も変わった。会ったのは2度目だけど、気に入られたのかな？

茜が山吹家に遊びに来たときのことを思い出す。宙太も悪い気はしないが、向日葵の友人なのだ、最初から良く思われていたとしても納得できる。

「おはよう、宙君。私のこと覚えてる？」

「うん、もちろん覚えているよ。おはよう、蘇芳さん」

宙太の顔を見ながらにこにこだった茜は、急に唇を尖らせる。

「ちがうよ、茜だよ。茜って呼んで。こういうのは最初が肝心なの。名前を呼び捨てのほうが男らしいよ」

「分かったよ茜」

宙太はにつこりと即答し、茜も嬉しそうに顔をほころばせる。宙太は親指を立てそうな勢いだ。その横で向日葵は困ったような複雑な笑顔を浮かべた。

最初は平坦な道で途中から上り坂の15分ほどの道。宙太、向日葵、茜の順番で並ぶと思い込んでいた宙太は、自分を真ん中に挟みこむように並んだ茜に戸惑う。

藤倉学園は、市内で一番最初に建てられた学校で、県内の公立校の中でも創立の古さは十指に入る。そのため、建物は増改築を繰り返しており築年数はまちまちだ。

教室などがある校舎は真新しいのだが、校門は古く威厳すら漂い、さらに校庭の脇に立つ部室棟は威厳を大幅に通り越して、枯れた様な年季が入っている。

3人は校門を潜り抜け、合格発表の時と同じ場所に張り出された、クラス分け表に見入っていた。新一年生はここで張り出され、2、3年生は新クラスの廊下側にクラス毎に張り出される。

3人のクラスはすぐに判明した。1組から順に見ていって、3人とも1組だったからだ。

向日葵と茜は尚も同じ中学出身者の名前を見つけようとクラス表の前をうろつろつとしていた。

暇をもてあました宙太は、人だかりを離れて2人を待つことにして、あたりを見回す。

校門をはいると大きな針葉樹が一本立ち、そこは少し広場になっ

ている。針葉樹の周りは芝生で、その周りに道がある。校門から見てそれらを挟んで正面に校舎が奥に向かって3棟、渡り廊下でつながって建っている。

棟と棟の間は中庭でベンチが置いてあり、手前から一年生と特別教室、2年生と3年生の一部、3年生の大部分と職員室とに分かれている。例外はあるが便宜上、一年棟、二年棟、三年棟と呼ばれている。

校門からみて“樹”の左手に体育館があり、それら校舎と体育館の横には校庭が広がり、校庭の隅には部室棟が建っている。

校舎と校庭の間に桜の木が一行に植えられている。今は桜の花では無く、芽吹いた若葉が舗装された地面に影を投げかけている。

宙太そいたがそちらに目をやったとき、風が少し強めに吹いて、一人の女生徒の服をはためかせた。

真新しい制服は同級生のようだ。すらりとした長身、髪は宙太そいたが初めて目の当たりにする銀髪で、スカートの裾と髪の毛を手で押さえ立っていた。

木漏れ日を全身に浴び、髪が光輝いているその様に、宙太そいたは美術の時間に目にしたヴィーナスの誕生という絵を思い出していた。

「女神様だ。女神様が風の悪戯に恥じらいを覚えてたたずむ、とても綺麗な。」

宙太そいたがしばし、運命的な衝撃を感じて啞然としている間に、女神様はその絵画のような美しい姿を宙太そいたの心に刻みつけ、校舎の影に去っていった。今のつぶやきは誰にも聞かれては居ないようである。

宙太そいたは肩を揺らす向日葵ひまわりに、ようやく我に返り、幾分ぼうつとし

ながら一年一組の教室に向かった。茜あかねにはなぜか、二の腕をつねられた。痛いよ、茜あかね。

教室に3人で入ると、一瞬静まり返り、その後、前に倍する勢いで騒がしくなった。

「（あの男の子誰？）」「
（分かんないけど可愛いね）」

ひそひそと交わされているが宙太そらたは気が付かず、窓際からあいうえお順に席が割り振られているため、そちらに向かう。

窓際のやや後ろの席、宙太そらたは当たり席だとただ喜んでいた。

一方、向日葵ひまわりと茜あかねは同じ中学出身の数名に教室の脇に引つ張られ、ほぼ尋問といえるものを受けていた。

「山吹さん、蘇芳さん。あの男の子知り合いなの？」

「知り合いというか、宙君そらは既に友達？」

「え、手が早いよ蘇芳さん。早いどころかフライングだよ。でも可愛いねあの子」

「だよね、私も始めて見た時に気に入ってね。一目惚れかも」

「で、何処の誰なの？ 知ってること教えてよ」

「じゃあ、向日葵ひまわりに教えてもらいましょう。向日葵ひまわりさん、お願いします」

友人達の盛り上がりいきよんとしていた向日葵ひまわりは、茜あかねに突然話を振られて慌てて言った。

「宙太は・・・」

「「そらたく!?」」

「「うわあ、な、何?」」

「宙太君なのね、それは分かったけど、何で呼び捨てなの?」

「え? だっていとこだし」

「「いとこ!?」」

「「うわあ、今度は何?」」

「だって山吹さん、あんなに可愛い男の子といとこだなんて、できすぎよ」

「そ、そうかな?」

向日葵は首をかしげ言い返すが、どうやら宙太の人気は向日葵の想像以上らしい。これで幼馴染なことや、一緒に暮らしていることが知られたらまずいなと思っていると。茜がしゃべり始めた。

「それだけじゃないよ、向日葵と・・・ふがふが」

「（し〜駄目、何か駄目っぽい。その辺はまだ黙っていて）」

向日葵は茜の口を塞ぎ、耳元で囁いて、お願いした。茜はごくごくとうなずき了解する。直ぐにはれる事になるだろうが、タイミンクというものがある。

「宙太の好物はとんかつだよ。あとカレーも好き。カツカレーだったら毎日でも良いって言ってたよ。嫌いなものは納豆とヨーグルト。でもチーズは平気みたい。趣味はジョギングで中学の時は長距離の選手だったんだって。あと、島育ちで泳ぎも得意。好きな女の子のタイプは聞いたこと無いけど、がさつな女の子は苦手だったよってだよ」

友人達を煙に巻くために盛大に煙幕をばら撒き、向日葵は事態の

收拾を図った。

いっぽう、そんな騒ぎにも気づかず、宙太は早速友達を作ろうと前の席の男子に話しかけようとしていた。

その男子は男性アイドルにありがちな長めの髪をした明るい表情の男子で、話しかけ易そうだったのだ。

髪色は明るい茶色で、校則はどこかに行ってしまったらしい。単に彼の辞書に載っていないだけかもしれない。最初の一声をどうしようか迷っていると、その男子が振り向き宙太に話しかけた。

「僕、大木拓也。君は名前なんていうの？」

「俺は大空宙太だよ。よろしく」

大木は学園の近所に住んでおり、付近のことに詳しいらしい。さらに姉が一つ上の学年にいて、学食や購買など宙太が知りたいことを良く知っていた。さらに嬉しいことに、学園の美人についても良く知っていた。

そんな大木に、宙太は心に湧き上がる、今、一番知りたいことを聞いた。

「学食にカツカレーはある？」

番外編 向日葵が見た宙太

番外編 向日葵ひまわりが見た宙太そらた

私が高校入試の前に、宙太そらたに最後に会ったのは、数年前に親戚でお正月に集まった時です。

その頃の宙太は私より背が低く、なぜか四角っぽい、変な髪形で、自分のことを“わし”と、言っていました。

月日がたち、久しぶりに会った宙太そらたは、あの頃より背が伸びて、私よりも高くなり。細いさらさらの黒髪、幾分大人びた顔つきで、心の奥に届くような透明感のある笑顔を見せてくれます。光っているかのようにも見える、瞳の白い部分のあの白さは、内緒ですが、私のお気に入りです。

この春から私の家に住み、同じ学校に通う私達。昔に戻ったようで嬉しいです。お姉ちゃんも李すてちゃんも嬉しいようで、家の中に今までと違う落ち着かないような、楽しいような、そんな雰囲気漂っています。

しかし、心配なことが一つだけあります。それは島とこちらの常識の違いといえるものでしょうか。この街が変わっているわけではなく、故郷の島が変わっているのですが、宙太そらたがそれに馴染めるかどうか不安です。

昔、私達家族が引っ越したときは、私はともかく、お姉ちゃんはかなり戸惑ったと言っていました。男の子がおとなしく感じると。

当時小学生だった私は違和感無く溶け込みましたが、今思い返し

てみると、違いは幾つかあったように思います。

まず、この街で始めてプールに行ったとき、男の人はみんなワンピース型の水着でした。そして、街中で見かける男の人で髭を生やす人は居なく、身なりに気を使った人も多かったですし、故郷の島に比べ、口調も穏やかです。

登下校の際、同級生の男の子は痴女に気をつけるように言われていたし、外で遊ぶのは女の子が多かった様に思います。男女の比率が違うので当たり前なのですが、故郷の島に比べると違いは明らかでした。

宙太が中学生のときに、男らしい男になると言い出しました。電話越しに話すことが多かったのですが、良く聞いてみると“ハードボイルド”と“任侠物”という古典ジャンルの映画の影響のようです。

どういふ男が男らしいのか聞いてみたのですが、漠然とした答えが返ってきました。“かっこいい”男、ということらしいのですが、宙太基準のかっこよさなので私には良く分かりませんでした。

宙太と暮らして気づいたことですが、宙太は薄着が好みらしく、こちらに来てすぐの時、薄手の半袖のＴシャツに陸上用の短いパンツという格好でランニングに出ようとしていました。露出狂に間違えられてはいけないので、今はまだ寒いからと上着を着せて出かけてもらいました。

薄着の方はお姉ちゃんにからかわれて、自分の常識の違いに気づいたようですが、人と話すときの距離感が近いのが、私と宙太がいとこだという理由では無いのなら、この先、騒動を引き起こしそうで不安です。

宙太本人に可愛いと言うと怒るのですが、可愛い顔でその笑顔、無防備に近づくことで勘違いする人も出てくると思うのです。

やはりというべきか、始めて会った茜や学校の友達の様子を見ると宙太のことが気になって仕方が無い様子です。宙太は可愛いだけじゃないのに。誰か、宙太の優しさに気が付いてくれる人が出てきてくれないかな。

そう考えると胸の奥がもやっとなります。この、うまく表現できない気持ちは何なのでしょう？

第1話 習慣

宙太の毎朝はジョギングから始まる。

小学生の頃まで飼っていた、犬の“ひろし”は朝の散歩が大好きだった。走るはその頃からの習慣だが、癖になっていた早起きを活用する宙太そいつたなりの工夫だった。今でも雨が降らない限り続けている。

その日もハーフパンツを履き、Tシャツの上に軽いベストを着て、宙太そいつたは走りに出かけた。

蜜柑みかんに薄着を指摘されて以来、宙太そいつたも気をつけている。おいしそつと蜜柑みかんに言われれば、宙太そいつたも自ずと気をつけるというものだ。

俺、食べられちゃうのかな？それも悪くないかも、と思ってしまうのだが。

走り始めた最初の頃は、山吹家を中心にぐるりと円を書くように走っていた。しかし、初登校の日以来、海岸まで行って、戻ってくるコースがお気に入りになっている。

海岸に着いた宙太そいつたはゆつくりとした歩きに切り替えて小休止をしていた。朝の藤が浜はウォーキングをする人、宙太のように走る人、犬の散歩をしている人で人数以上の活気がある。体を動かすことが目的の人しか居ないせいだろう。

海の上には波待ちのサーフボードが列を作っているのが見えるが、実際に波に乗っている人はいない。今日は波も穏やかでサーフィン

日和ではないらしい。藤が浜は位置的にも、あまり波がある場所ではなく、のんびりしたサーファーが集まりやすい。

いつかサーフィンにも挑戦してみたいなと思いつながら、その場を後にして山吹家に走って帰る。走りながら、もつと数多くの初挑戦を試してみたいと思っていた。今日のところはそのリストに“サーフィン”と加えておく。リストには他に“バイト”、“彼女”、“カレー屋さんめぐり”と書かれている。

宙太そらたが家を出る時間には、向日葵ひまわりは既に起きている。今日はその時に向日葵ひまわりに頼まれていた牛乳を買って帰り、朝ご飯の支度をしている向日葵ひまわりに渡す。一緒に向日葵ひまわりに持たされていた、“がまちゃん”と呼ばれている、山吹家食費専用小銭入れも返しておく。その名の通り、かえるがデフォルメされた、がまぐちのサイフだ。冷蔵庫の上に住み、いずみが定期的に確認し補充する為、いつもお腹いっぱい可愛い？ペットだ。

「ただいま〜」

「おかえり、宙太そらた。牛乳、ありがと。朝ご飯は、もうすぐできるからね」

「うん、やっぱりいいね」

「？」

向日葵ひまわりは制服にフリルの付いた淡いピンクのエプロン姿で、宙太そらたの好みだ。余計なことを言ってしまったが笑顔でごまかして置く。

向日葵ひまわりとしては宙太そらたの好みに合わせたわけではなく、家族の朝の都合に合わせて、自分の支度が間に合わなくなるので、先に着替えを済ませているに過ぎない。

「昨日の夜、李ちゃんすもせが全部飲んじゃってね、一本丸々あったのに」
「そっか」

微妙に気を使う話題だと思いつながら返事をしておく、牛乳を飲むと胸が大きくなるのは俗説だと思つたが、下手に触れない方がよさそうだ。

いずみも蜜柑みかんも大きいのだから李すもせが大きくなるのは間違いないだろう。のどを潤すために買ってきたばかりの牛乳を飲みながら、牛乳はうまい、と思つた。自分はおいしいから飲むのだ。そう、おいしいから飲むのだが、背は伸びるのだろうか？

ボタン！

汗を流すためにシャワーを浴び、脱衣所で着替えていると李すもせが突然入ってきた。宙太そいつたが腰にタオルを巻いた状態で、驚きに固まっていると李すもせは急いだ様子で言う。

「お兄様すいません、李すもせは急いでいます。すぐにシャワーを浴びなくてはいけませんので失礼します」

おもむろにパジャマのズボンを脱ぎ、上のボタンをはずします。なぜかその間も宙太そいつたから視線を逸らさないし、素肌を隠そうともしない。

慌てた宙太はその時になり、ようやく李すもせに背を向けた。おもわず李の細く白い足と青いショートスをじっくりと見入ってしまった。寝るときはブラはしないらしい。

すぐく、肌が白いんだな李ちゃん。

しかし、こちらを向いたまま着替えるのはなぜだろう。

李が宙太をじっくりと観察するためなのだが、見られることよりも李の裸に興奮を覚えた頭はうまく回らない。

「李ちゃん、だめだよ。まだ着替えているんだから、一声掛けてよ……!!!」

口ではお兄さんぶり、背中越しに注意するが、その時、宙太は気づいてしまった。宙太が背を向けた先には洗面台があり、鏡の中に李の着替えが映っている。

じろじろと注視しないように、何気ない風を装いながらも、もちろん見ても駄目だとも思いながら、やはり目が離せない。

鏡の中の李は窓から差し込む朝日が作る淡い光を身に帯びて綺麗だ。滑らかそうなお腹は呼吸とともに上下し、控えめな胸は影を伴い自己主張している。

李の体は横を向き、長い黒髪を耳に掻き揚げ、ショーツを脱ぐためにつつむいている。交互に抜く足がみずみずしくも色っぽく、華奢な全身にあつて女性らしさを多分に秘めた、腰からお尻への柔らかな曲線が宙太の中の男を刺激する。

脱ぎ終わった李は宙太に一声掛ける。

「それでは、お兄様」

言いながら、鏡越しの宙太に、にっこりと笑いかけ、浴室に入っ
ていってしまった。

宙太はじつと見ていたことに気が付かされていた事を悟った。それ

どころか、これは全て李すもせのわざとやったことだろう。

宙太そらたの方を向きながら着替えていた為、正面を向いているはずが、鏡に映ったのは横を向いた体、そして肝心なところは隠した姿勢、最後の鏡越しに目を合わせた笑顔。

男の事情に悩ませられながらも、慌てて着替えて部屋に戻る宙太そらたは、それでも得をした気分になる程度に自分に素直だった。

朝、最初に早起きした向日葵ひまわりが、次に李すもせが身だしなみを整え、時折シャワーを浴びる。宙太そらたはその間、外に走りに出かけ、その後シャワーを浴びる。本来ならば鉢合わせになることは無い。

それが山吹家の新しい習慣だ。

第2話 大木拓也

大木拓也は宙太そらたの一番新しい友達だ。地元出身の彼は宙太そらたに様々な事を教えてくれる。初対面の宙太そらたにも自分から話しかける程、明るく社交的なのだが女子と話すのは苦手なようだ。

いつものように、宙太そらたと拓也は学食で昼食を食べていた。特に宙太そらたは同じメニューを頼むので飽きることが無い。

「俺はいつも考えるんだ。とんかつとカレーの組み合わせが作る味わいの中には、神の気配があると思わないか？」

「いや、おいしいとは思うけど、僕はそこまでは思ったこと無いよ」

理解してはもらえなかった。そんな拓也はいつもうどんを好んで食べている。

「うどんの出汁の中に宇宙が見えることはあるけどね」

「そこまで好きなんだ」

どんな味なんだ、スケールがでかい。表現のでかさで負けた気分がした。ついでに、カレーがうどんに負けた気もした。男の子にとってでかさとは何者にも勝る正義なのだ。

気が合うし、話しも合うのだが食の好みは少しすれ違っているようだった。

そんな時、学食に食べに来ていて、隣の席に座っていたクラスの女子に話しかけられた。

「2人とも、いつも学食なの？」

「うん、だいたい。向日葵ひまわりがたまにお弁当作ってくれるけどね」

「僕はいつも学食だよ」

しばらく雑談を続けるが、こんなとき話すのは宙そら太ばかりで、拓也はあまり話そうとしない。女子2人と食べ終わるのが一緒に何となく4人で自販機で飲み物を買って、教室で雑談の続きをした。

「大空君は山吹さんと暮らしているんでしょ？同級生と一つ屋根の下ってどんな気分なの？どきどきしたりする？」

「暮らしているといっても2人きりじゃないし、それにいとこで小さい頃は家が隣だったからね」

どきどきさせられる相手は、主に蜜柑みかんや李すももで向日葵ひまわりはどちらかという心安心できる相手だ。

「大木君は？大木君のお姉さんって雛子先輩だよ。あんな美人と一緒に暮らしているとどきどきしないの？」

「姉さん相手にそれは無いよ」

「拓也のお姉さん、美人なの？」

「うっ」

拓也は返答に困るが、先ほどから主に拓也に話を振っている女子が代わりに答えた。

「美人だよ。それに、おっとりしていて、面倒見が良くてね。私と同じ料理部でいつもお世話になっているんだ。おっぱいも大きいしね」

「そうなんだ。拓也、紹介してよ」

「ええ？姉さんに興味あるの？」

「美人でスタイルが良いのに気にならない人はいないでしょ」

「うわ、大空君って大胆なこと言うよね。」

感心したように言われたところで、チャイムが鳴り、そこで雑談はお開きとなった。

「拓也はあんまり女子と話さないよね？」

放課後、拓也と一緒に下駄箱に向かいながら聞いてみた。

「すこし、緊張するんだよ。宙太は平気そうだね」

「うん、島育ちでみんな家族ぐるみの付き合いだったし、しかも物心付いた頃には知ってているって人ばかりだったから」

「そうか、僕もレンズ越しなら緊張しないんだけどね」

それでは会話にならないだろうと思ったが、写真部に所属している拓也らしい。

ある日のこと。

体育の授業は1組と2組の合同で行われる。正確には1組と2組の女子、1組と2組の男子の組み合わせで行われる。

「宙太、着替えに行こう」

授業前、拓也と一緒に更衣室に向かう。藤学には男子のみ更衣室がある。島の中学では更衣室なんてものは無く、合同クラスのどちらかが男子用、残りが女子用だったので、たいした進歩だ。

今日の授業はサッカーで、大人数でやるスポーツはあんまり経験

が無く楽しみだ。

宙太そいつたは小さい頃から外を飛び回るように遊びまわっていたため、足は速く、持久力も抜群なのだが、球技に必要な遠近感だけ、今ひとつだった。

一方、拓也の方は飛び抜けて得意なものは無いがなんでもそつなくこなす。5段階評価で言えばオール4、宙太そいつたは5か2のみでできている。

拓也にとってオール4はコンプレックスだ。何をしても誰かに負けてしまうのだ。長く続けたものほど多くの人に負けるのは、続けたことで得られる伸びしろが他の人より少ないことをさしている気がする。

姉に愚痴をこぼした時に「好きなことを見つけて、のめり込みなさい」と言われた。それで今は写真にのめり込んでいる。

「あれ？」

準備体操の後、2人一組でパスの練習をするのだが。どうやら宙太らたはパスを受けるトラップが下手なようだ。それでも楽しそうにボールを蹴っている。

宙太そいつたの楽しそうな様子を見て、拓也のオール4は能力ではなく、何でもそつなくこなそうとする性格が生み出すものなのかもしれない、と拓也は思った。

そう考えたとき、姉の言っていた“好きなこと”の意味が分かった気がした。

本人の並々ならぬ興味だけが”5”への道なのかもしれない。下手の横好きと言われるような気もするが、主審は自分が務めているのだ、誰にも文句は言わせない。

宙太そらたの笑顔がその考えの正しさを証明している気がした。

第3話 カレー屋さんに行こう

「よし、行こう」

その日曜日、宙太は以前からやりたいと思っていたことを実行しようと思っていた。昨日の内に向日葵ひまわりに昼食を断って置いたので、実行しなければ食料は無い。

家を出て、電車に乗り、藤倉学園前駅に向かう。いつもの通学時とは違い、人もまばらでのかな車内。のんびりした気分のまま宙太らたは藤倉学園前駅に降りた。

「気が抜けるほど、ゆったりしてたな」

目指すのは初登校の日に見かけた、海辺の白い建物。以前聞いた拓也の話では地元でも有名なカレー屋さんだということだ。

改札を抜け、踏切を渡り、海辺側の道に出る。藤学の制服を一人も見かけない駅前駅前は新鮮な風景だ。

駅から歩いて5分とかからない店までの道を、のんびりと歩いた。

この付近の海辺は浜が無く、もしくはあっても降りられるほどではないし、岩場の多い地形になっている。

歩道は整備されているが藤が浜のような散歩などに向いている歩道ではなく、護岸をかねたコンクリートの道だ。

そのかわり景色は良い。ゆるく大きな弧を描く、藤が浜を中心として東西に続く波打ち際の西端に位置して、その雄大な景色を一望できる。

反対側の西の遠くに藤の島が見える。島というのが既に立派な道路

で陸続きになっているので突き出た岬のように見える。この近辺から藤の島の近くまでは砂浜が無くコンクリートの護岸が続く。

「うわっ、なんかおしゃれな感じだな」

いつも遠目で見ていた白い建物、その店はクレセントムーンという名前で、オレンジの屋根、白い壁、大きな窓を持ち、リゾート感の漂う爽やかな印象だ。

一階に客席と大きなテラス、2階に少しの客席と小さなテラス。一階のテラスはオープンカフェのようになっていて建物に含まれないので、敷地の割りに建物は大きくない。お値段が気になるところだが事前にさほど高くは無いと聞いている。

初めてのお店で一人様。宙太そむたは緊張感を感じながらも意を決して入る。決する前に大分躊躇の時間があつたのはご愛嬌だ。宙太そむたはがんばったのだ。向日葵ひまわりに昼食は断り、既に背水の陣は敷いてある。

店内はやや混んでいて、テーブル席を希望する人は少し待たされているようだ。

出迎えたのはカフェで見るとような黒いパンツ、白いシャツと小さいエプロン姿のウェイトレスで、一人の宙太そむたはすぐにカウンター席に案内された。窓に近く、海だけが大きく見えていた。

初めてのお店では一番シンプルな料理を頼む、と決めているのでカレーとサラダ、コーヒーのセットを注文する。決めてはいたがカツカレーとシーフードカレーも気になる。

「お待たせしました。カレーセットのカレーとサラダです。コーヒーは食後にお持ちします」

「うわ、ありがとう？」

びっくりして途中から疑問系になってしまった。カレーを持ってきたのは、なぜか拓也だった。

「見ての通り、ここでバイトしてるんだ。実はここおじさん夫婦の店で、たまに呼ばれるんだよ。」

「そうだったんだ。でも、そういうことなら言っておいてよ。もっと早く来たのに」

「働く姿を見られるのは恥ずかしいからさ。黙ってたんだ」

「そういうもの？かっこいいと思うけど」

宙太そじたの言葉に拓也が苦笑したところでお客さんに呼ばれた。

「じゃあ、ゆっくりしてってよ」

「うん、ありがと」

少し緊張していたところに拓也と会い、緊張がほぐれた。落ち着いた気分でカレーを口に運ぶ。うまい。

市販のルーで作る、家のカレーも好きだが、そちらは感覚としてはお味噌汁なのだ。まるい印象で家の味ともいえる。一方、お店で食べるカレーはスパイシーで香りも味も直線でできていて、きれがある。

食べ終わり、食後のコーヒーも拓也が運んできてくれた。

「これ、おまけだよ」

頼んでいなかった、プリンを持ってきてくれた。

「ありがと。うん、プリンうまい。カレーもおいしかったよ」

スパイスの効いたカレーの後でプリンのお菓子が体に染み込むよう
だ。

「うん、よかった。僕は子供の頃からずっと試食でカレーを食べて
るから、すでに良く判らなくて」

「なんて贅沢な」

「あはは、そうだよな」

会計を済ませ、店を出る。

「シーフードカレーもおいしいから、今度はそれを食べてみてよ」

帰り際に卓也が宙太そりたに声を掛けた。うなずき、拓也に手を振る。

働く姿を見られるのは恥ずかしいといいながら、なかなか商売上
手だ。

第4話 茜の調教

その日、向日葵^{ひまわり}にお弁当を作ってもらった宙太^{そらた}は向日葵^{ひまわり}、茜^{あかね}と中庭のベンチでお昼ごはんを食べていた。

宙太^{そらた}としてはお弁当でカレーもありだと思っただが、向日葵^{ひまわり}は断固として拒否する。基本的に教室で食べるお弁当でカレーは駄目だと言っただ。

以前、ある猛者がお弁当でカレーを持ってきたとことがあり、その時、教室中に蔓延したカレーの匂いと何ともいえない空気を向日葵^{ひまわり}は忘れられない。

悪いことをしたわけでもないのに誰も注意できないが、教室はいつもとより静かになった。このとき向日葵^{ひまわり}は、これが“マナー”というやつなのかな?と思った。

女の子に作ってもらったお弁当、蓋を開けるときにわくわくするが、過度な期待を顔に出すのは男らしくない。

「おお、おいしそう。鶏のから揚げ、好物なんだよね〜」

しかし、思わず声が出た。向日葵^{ひまわり}がお弁当を作ってくれるときはお肉がメインのときが多い。うれしいかぎりだ、お肉は全部、宙太^{そらた}の好物だから。レバーを除く。

いただきますも忘れ、がつつく宙太^{そらた}。茜^{あかね}はなにか言いたそうにしていたが、そんな宙太^{そらた}の様子にしばらく黙ってご飯を食べる。

空腹時の男子高校生がお肉を食べ始めた時、5分はそっとしてお

いて上げるのが、基本的な優しさなのだ。

から揚げ一つを残し、他のおかずをほぼ制覇する段階になって茜あかねは宙太そじたに話しかける。

「宙君ひんはおいしそうに食べるね。これ私の自信作の玉子焼きだよ。食べてみて」

茜あかねが自分のお弁当から宙太そじたのお弁当箱の中に玉子焼きを一つ分けた。宙太そじたとしては「はい、あ〜ん」かと一瞬思ったが、まだ早い。「まだ」って何だ。とにかく食べてみる。

「おっ、うまいよ。」

おいしかったので味わって食べてみる。

「お弁当用に半熟じゃなくて、出汁を利かせているんだね。茜あかねは料理がうまいんだね」
「えへへ。褒められちゃった。でも料理はそこまで得意じゃないんだ。うちのお母さんが玉子焼きだけは苦手だね、私が前から作ってたから玉子焼きだけ得意になったの」

普段は押しの強い感じのする茜あかねだが、今は宙太そじたに褒められて少し照れくさそうだ。
そんな時に、向日葵ひまわりが声を上げた。

「あ、あれ大木君じゃない？女の人と歩いているの」

向日葵ひまわりが見ている方向に、校舎を結ぶ渡り廊下の一つがあり、そこを男女が並んで歩いている。

「大木君だね、隣にいる人誰だろう？綺麗な人。それになんか仲良
さそうだね」

その女性は長い黒髪で温和な顔つき。第一印象としては包容力が
あるという感じだ。しばらく見ていると。

「ちょっと、宙君。もしかして見とれている？」

「ちょっと、気になってさ」

拓也が仲良くしている相手だ。どんな人かは気になる。
しかし、茜は異性として気になっていると取ったようだ。

「宙君、私のこと褒めたばかりで、もう目移りなの？」
「う、ごめん」

宙太としては悪いことをしているつもりは無いのだが、反射的に
謝ってしまう。男らしくないと思うが調教済みの体が恨めしい。女
の人に高圧的に出られると逆らえないのだ。
宙太、向日葵、茜の順で座っていたのを、茜が席を移動して宙太
を挟む形で座りなおしてから言う。小声で。耳元で。

「（あの先輩、おっぱい大きいね。宙君は大きいのが好きなの？）」
拓也達を追うようにしていた宙太の視線が茜に固定される。

「（き、きれいじゃないけど）」
「（わたしも、結構、大きいよ）」

宙太を見上げる姿勢を至近距離でとりながら、追い打ちを掛ける。胸元が少し覗けるが暗くて何も見えない。何も見えないが大きいのは分かる。なぜか太もみに手を置かれて、未知の刺激に疼きが走る。そして、微妙な間があった後、なぜか茜は太ももをつねってから言った。

「悪いと思ってる？宙君」

「うん、ごめん。で、でも、あの女の人たぶん拓也のお姉さんだよ」

もはや、なんで怒られているか分からない。すぐに他の女の人を褒めたことが、大きいのが好きなことが、茜の大きさを褒めなかったことか。茜にとってもそれはどうでもいいのだが、しどろもどろになっていく宙太が面白くて続けてしまう。

「言い訳なんて男らしくない」
「うつつ」

宙太にとって痛いところを突かれた。茜はひとつだけ残っていた、から揚げを指差して言う。

「そのから揚げ、ちょうだい。それで許してあげる」
「わかった、はい」

宙太は玉子焼きのお返しだなと思いつつ、茜の弁当箱に入れようとするが。

「だめ、あーんして」
「良いの？わかった。はい、あーん」

宙太は憧れの“あーん”ができるので嬉しく思いながら、頷く茜

に、作法にのっとり言った。茜あかねは小さな口を大きく開けて、差し出したから揚げに食いついた。

「宙君そらのおいしいよ」

餌付けをしている気分になると、茜あかねが唇を怪しくてからせながら、誤解されそうなことを言う。

しかし、いやらしい意味に取られそうなせりふとは裏腹に、茜あかねの顔は照れ笑いで真つ赤だった。見上げるようにしていた顔も俯き、至近だった宙太そらたとの距離も、今は少し開いている。

かわいいところあるな、茜あかね。

小さな後頭部と赤い耳を見つめながら。自然とそう、考えていた。

第5話 女神様の正体

その日の放課後、宙太は茜の借りた図書室の本を返却するために図書室に向かった。

藤学の図書委員会は返却時は本人でなくても良いとしているし、返却BOXがあるので委員の不在時はそこに投函するだけでよい。それでも宙太が頼まれたのは長引いたホームルームのせいで茜がテニス部の練習に遅れそうだった為だ。

図書委員会は返却は柔軟に対応するが延滞にはとても厳しいことで有名で、3日で呼び出し、5日で反省文と決まっている。

たまには本でも読もうかな。知的な男も悪くない。

返却手続きが終わり。そんなことを考えていた。

宙太は本はあまり読まない、そして雑誌も漫画もあまり見ない。

その所為なのか適当に選んだファンタジー小説のプロローグの箇所を読み終わる前には寝ていた。

「あれ？いつの間に」

定番の台詞をつぶやきながら起きる。夢を見ていた気もする。

その時には既に太陽は傾き、図書室の中をオレンジ色に塗り替え終えたところで、肩には誰のか分からない、うすい紫色のカーディガンが掛けられていた。

その色合いも、動かしたときに香る匂いも

その持ち主が女性であることを示していた。 図書委員の女の人の物なのかな？

「すみません、お借りしていたようで」

カウンターに行き、雑誌をめくっていた図書委員の女の先輩に返しに行った。

「ああ、君ぐつすり寝てたね。でもそれは私のじゃないよ、委員で預かってくれるように頼まれたけどね」

その先輩は困った弟を見るような優しい目をして、笑いながら言った。ぜひとも、その親切な人に会ってみたくなった。

「自分で返しに行きたいので、誰が貸してくれたか、教えてもらえませんか？」

「残念。教えてあげたいけど、恥ずかしいから言わないでって言われてるのよ」

「そこを何とか」

「駄目よ。恩をあだで返すことになるわよ。その人は知られたいくないって言うことなんだから」

「うつつ」

正論過ぎて、ぐうの音も出ないとはこのことだろう。カーデイガンを先輩に渡して、図書室を後にする。何か縁があるかもしれないと思い、眠気の前になった小説を借りていくことにした。

山吹家に帰ったところで、先に帰宅していた李すもせに呼び止められた。

「宙太そいたお兄様、肩に何か付いていますよ」

「え？どこ？とれた？」

肩の辺りを手で払い、確認するが取れてはいないようだ。

「じっとしていてくださいね」

李すもてが取ってくれるようだ。すつと近づき摘み上げてくれる。ああ、李ちゃんすもては頭の天辺にある髪の毛の分け目も真つ白だな。

すぐに捨ててしまうと思ったのだが、李すもては摘み上げたそれをじつと観察している。

「帰りに馬にでも乗ってきたのですか？」

「いや、そんなことしてないけど」

今までの人生で馬には近づいたこともない。

李すもては不思議そうな顔をしたが、向日葵ひまわりの呼ぶ声にすぐに鑑定を諦め、それを渡して台所の方に行ってしまった。渡してもらったそれは長くて白い糸のようだった。

「なんだろ？」

しかし、宙太そらたもすぐに諦めた。

その夜、借りてきた本を途中まで読み進めてから、宙太そらたはお風呂に入った。湯船でくつろぎながら、妖精や女神の出てくるその話を思い出した時、閃くものがあった。

「あれはもしかして、女神様の髪の毛なのかもしれない」

初登校の日に見た、木漏れ日を浴びて煌く銀色の髪が思い出され

る。思いついたら、くつろいでいる気分ではなくなった。

湯から上がり、あわてて体を拭き着替える。しまった、本を読んだ後、ぼんやりしたまま風呂に来たから、着替えを忘れた。まあいい、腰にタオルを巻けば良いだろ。

脱衣所から出て向日葵を探す。台所でなにかやっているようだ。

「向日葵、同じ学年の銀色の髪をした女の子って、なんていう名前の人？」

「きゅっっ」

「わっ、向日葵。どうしたの」

振り向いて、宙太の方を見たとき、向日葵は目を回してしまった。

「向日葵ちゃんには刺激が強すぎたのね」

その声に振り返ると、蜜柑がなぜか床に寝そべり、李は無言で携帯電話を構え、フラッシュを光らせていた。

すぐに逃げ出したが、後で李には拝み倒してデータを消してもらった、そのおかげで余計な約束をすることになった。2人の記憶も消したいが、それはできそうに無い。

回復した向日葵に聞き出したところ、女神様の名前は淡藤すみれという名前らしい。

確証は無いが、カーディガンを貸してくれたのも彼女だろう。

第6話 サーフインをしよう

「これだ！」

数日前に念願のカレー屋さんめぐりをした宙太そらたは続けて、新しいことに挑戦しようと考えていた。

そんなとき、市の広報誌に格安のサーフィン体験会の案内が載っていた。

その体験会は市と地元のサーフショップの共催で、浜辺のごみ拾い、バーベキュー、希望者のみによる2時間ほどのサーフィン体験がセットになった内容で、参加費のほとんどはバーベキューによる昼ごはん代金だろうと思えるほどに安かった。

「よし、行こう向日葵」

事前に話を聞いて一緒に行くと言い出した向日葵ひまわりと家を出る。サーフィンには参加しないが、海辺の街に住むものとして、浜辺のごみ拾いなどのボランティアは気になっていたらしい。

持ち物は特に無く、必要なものは全て貸してくれる。動きやすい格好であればそれだけで良い。

2人で歩いて着いた会場は藤の浜にあり、のぼりが立っていて、これが恒例行事であることが伺える。後で聞いた話によると、年に2回、海開きの前に行われるらしい。ボランティア清掃だけはもっと回数が多く行われている。

開始時間の30分前に着いたのだが、既にごみ拾いを始めている人もいた。

「参加者の人はこちらで、手続きしてくださいー！」

声の方を見ると、赤いジャンパーを着た日に焼けた人が受付をしていた。運営は市の職員がやっているのかと思っていたが違うようだ。市の職員も見かけるが多くは無いようだ。

受付を済ませ、注意事項を聞く。9時に挨拶があり、それから清掃開始。詳しい話はその時にするので、それまではそれぞれ好きにしていってくださいとのことだ。

「どこかに座っていようよ、宙太そいつ」

「そ、そうだね」

宙太そいつは落ち着かない様子で周りを見ていたが、向日葵ひまわりはそんな宙太そに声を掛ける。そして一緒に手近な段差になっている場所に座る。

「俺はもつと、こじんまりしたものだと思ってたけど、けっこう参加する人いるんだね。」

「そうだね、私もびっくりした。藤倉は観光地だし、藤の浜は有名な海水浴場だから地元の人や清掃とかの意識が高いのかもね」

宙太そいつから見れば、ボランティア清掃に興味のある向日葵ひまわりも十分意識が高いと思うのだが、実際に行動している人を間近に見る向日葵ひまわりは感心しているようだ。参加者の年齢層は幅広く、人数で言えばむしろ若い人のほうが多いくらいだった。ジャージを着た、中学生もいた。

のんびり話をしてしていると、開会の時間となり、会長の話を聞くため集まった。

会長と言っても恰幅の良いおじいさんではなく、田中さんという小麦色に日焼けした30代くらいの女性だった。

田中さんは2児の母で海の間近に住み、昔からボランティアでゴミ拾いをしていて、前会長から引き継いだという。

「皆さん、おはようございます。初めての皆さんも、いつも来てくれている皆さんも今日は楽しんでいってください。」

その後は説明や注意事項が続いた。流木などの大きいごみは市のほうで撤去済み。宙太^{そいつた}は知らなかったがビーチクリーナーという耕運機のような機械で大まかにゴミは取ってあるので、機械の動かせない狭いところや端のほう、細かいゴミを取って欲しい。以前、医療用の注射器が流れ着いたことがあるのでゴミには素手では触らずに配ったトングで拾って欲しい。どうしても手で拾うときのために軍手も配ります。

「最後に、これは仕事でも私達が絶対にやら無くてはならないことでもありません。だから、皆さんには楽しんでやって貰いたいです。隣り合った人と会話をしながら、ときおり休みながらやりましょう。そのほうがお昼ご飯もおいしいですよ。」

朗らかに言い切った会長に宙太^{そいつた}の気も軽くなる。隣の向日葵^{ひまわり}も同じ気分のようにだ。先ほどまでは使命感のようなものに燃えていたようにだ。

「ご町内をゴミから守るのは、たまにやって来る正義のヒーローではなく、いつもそこにいる一般人が良い様だ。」

トングと軍手とビニール袋を受け取り、向日葵ひまわりと並んでゴミを拾う。

「細かいゴミって言うから、俺はガラスの破片が多いのかと思ったけど、ガラスはあまり見ないね」

「そうだね、花火のゴミが多いね。タバコも多いね」

移動してゴミを拾う。周りには散歩している人も多く、ボランテイアにいそしむ自分達は何が良い事している気がする。こういうのも男らしいかも。

「宙太そじた、なんか人増えてきたよ」

周りを見ると、確かに人が増えている。よく見てみると増えた人のほとんどがサーファーのようだ。会長と話をしている人もウエツトスーツを着ているのでサーファーのようだ。向日葵ひまわりは感心したように言う。

「何かいいね、こういうの。みんな会長の知り合いみたいだよ。日に焼けてかつこいいな」

「そうだね。にわかな俺達とは大違いだね」

そういいながら、宙太そじたも向日葵ひまわりも笑顔になっていた。

ゴミ拾いすることがかつこいいのではなくて、それを自然とできる、その人そのものがかつこいいんだな。

がむしゃらではない、その“自然”が当然になったら、自分も男らしくなったといえるのかもしれない。

のんびりとした、ゴミ拾いも終わった。広くはあるが、砂浜にあ

まりゴミは落ちていなかった。機械の所為か、マナーの所為かはわからないが。

続いてのバーベキューで、準備をするのは主に参加者だった。やることの書いた紙が沢山用意されていた。タレの分量、野菜や肉を切る大きさと量、火の起こし方等、おそらく下準備にかえて時間がかかるのではと思えるが、参加者を楽しませる工夫なのだろう。

料理のできない宙太は火起こしの方に行きたかったが、向日葵に引つ張られて、一緒に野菜を切る係りを任された。

絵のふんだんに描かれた指示書に従い、横からの向日葵の注意も聞きながら切る。

「きや、宙太。手つきが怖いよ。切り落とす気なの？指要らないの？」

「そんなわけないだろ、まじめにやってるよ」

「いや、だめ、やられる」

宙太が切るたびに向日葵が身をよじる。そのたびに一緒に作業をしていた人が笑い声を上げる。それに“やられる”って何だ、向日葵の頭の中の向日葵の配役が気になった。

「それじゃ、将来は彼女が主婦して、彼氏は仕事に出ないといけないね」

周りの人にはカップルだと思われてしまった。あと、野菜の皮むきはやらせてもらえなかった。

今回のバーベキューもおいしかった。会長さんこだわりのタレで

食べるお肉も不揃いのおにぎりも青空の下で食べるといつものとは違うおいしさがある。

バーベキューは食事ではなく、イベントなのだろう。野外で、大勢で、いつもと違う何かと一緒に、沢山のスパイスがバーベキューをおいしくさせる。

後片付けが終わると、ここまでの参加で帰る人とサーフィン体験をする人に分かれるために簡単な閉会の挨拶があった。

楽しく感じ、また参加したいと思えた人は再び参加して欲しい、今回の参加者も半数以上は2回目以上、気をつけて帰ってください、という内容の簡単な挨拶だった。

宙太はゴミ拾いと言っていたが、このイベントの名前は”藤の浜ビーチクリーン“という名前で、英語にするとなぜかっこよく感じるのが不思議だった。

「じゃあ、見ているから、がんばってきてね」

「お、おう」

用意されたテントで着替え、出てきたところで向日葵ひまわりに声を掛けられた。ウェットスーツは見た目より小さく感じ、結構締め付けられる感じがする。

参加者は男女3名ずつの6名で、講師役は会長とサーフィショップの店員の人だ。

「じゃあ、始めましょう。最初は慣れないと思うけど、サーフィンは乗れなくても結構楽しいものよ」

今回習うのはロングボードで、初回はサーフボードの上に立つのも難しいらしい。

主に肩を回す準備体操を終え、パドルというボードの上に腹ばいになり手で水を掻く動作を習う。

砂浜の上で動作の練習を形だけ習い、すぐ海に向かう。足首とボードをリーシュコードと呼ばれるゴム製の紐で結ばれる。鉄球を鎖で足首に結ばれる受刑者のような感じだが、ボードと自分が離れるのを防ぐためにリーシュは必ずつけるものらしい、マナーでもある。ボード持ち海に向かう、良く見かけられるように片手で小脇に抱えたところだが、ボードは想像よりもかなり重く幅も結構あって持ちづらいので両手で持って運ぶ。

パドルをしようとするのだが予想以上に難しい、まずボードの上に腹ばいになるのが一苦勞で、次に水を掻くたびにふらふらして落ちそうになる。

乗れそうな波にあわせパドルでスピードを出して乗るのだが、そのスピードが出ない。ちなみに波に乗る瞬間はテイクオフと呼ばれる。

でも、初めてウエットスーツを着て入る春の海は温かった。水温が高いのではなくウエットスーツに入り込んだ水が体温で温められ体をくるんでくれるのだ、ウエットスーツは水を遮断するものだと思っていた宙太そいつはそんなところに感心した。

そして、普段は砂浜から海を見ているが、今は海から砂浜を見ている。この視界の変化は宙太そいつを海に、自然の側に属しているかのよくな自然との一体感を感じさせる。

乗れるほどの波があまり立たない藤が浜でも海に入るサーファーが多いことは、こういう所にあるのかもかもしれない。

2時間の体験の中で宙太そいつがボードの上に立ったのは一瞬だった。大きめの波が来たときに講師役の店員さんにボードを押してもらってテイクオフできた。

一瞬ではあったが高揚する引き延ばされた時間の中、宙太そいつはしぶ

きを上げるボード、海の上に直接立つ視点、砂浜の向日葵ひまわりを見て、
笑いながら海に落ちた。

海に落ちた宙太そらたが向日葵ひまわりに大きく手を振っている。

「そんな顔、見せられたら、好きになっちゃうじゃない・・・」

誰かに、そう呟いた。

第7話 淡藤すみれ

「今日も、自分から話しかけられなかった・・・」

すみれは学校から帰宅し、自室のベットに腰掛け一人つぶやいた。

この春まで通っていた、私立の女子校から公立の藤倉学園に進学し、早一ヶ月。すみれは環境の変化にうまく対応できないでいる自分自身に戸惑っている。

すみれの生家である淡藤家は古くから続く

家柄で、大昔は地主として、近年では呉服問屋として藤倉の近隣では有名な家だ。

すみれ自身は女子校時代は撫子会という会の会長をしていた。撫子会とは茶道、華道、日本舞踊、料理、着付けなど古来から日本女性に嗜まれてきた教養を身につけ、母として妻として理想的な女性を目指す、という趣旨の会だ。

会と付く部活動は撫子会だけで、撫子会の会長は憧れの存在とされていた。すみれはそんな人物だった。

自分ならうまくやっていける、藤学に進学するときはずう思っていた。幼年部、初等部、中等部と女子校で過ごしてきたが男性を苦手に思ったことは無いし、同性の友人も多かった。

クラスメイトにいじめられているわけではない、どちらかというところ、かなり親切にしてもらっていると思う。ただ、その親切が旅行中の外国人に道を聞かれたときのような親切さを感じるの、自分の被害妄想なのだろうか。

ため息をつき、今日も女子校時代からの友人が心配をしてくれて来てくれる電話を、ただ、ぼんやりと待っていた。

そんな時に決まって考えるのは、図書館の窓際の席で寝ていた彼のことだった。

その日のすみれは、終業後も何となくまっすぐ家に帰る気にならず、かといって何もせずに教室でぼんやりするわけにも行かず、図書室に来ていた。

以前の学校なら、会室に向かうところだが、今のすみれには所属し、訪れるべき場所が無い。藤学には撫子会で行っていたものうち、茶道、華道、着付け、日本舞踊は関係する部が無い。書道部と料理部はあるが、すみれの好きなものは茶道と華道なのでそれらの部に入る気にはならなかった。料理ならいくらか興味があるが、茶道部と華道部が無いことを知ったときの落ち込みが、すみれから部活に対するやる気を奪っていた。

適当に選んだ本を読んでいると、斜め前の席に座った、小柄な男子が本を読み始めた。とたんに寝てしまった。

ぱたん、と音を立てて倒れたハードカバーの本、彼は顔をこちらに向けながら、本と机にほつたペタを半分づつくっつけて眠っている。あれでは頬に跡が付いてしまうし、風邪を引いてしまうかもしれないと思ったが、その幸せそうな寝顔に起こすわけにもいかず、幾分はがゆい思いをしながらも、すみれは自分の本の続きを読んでいた。

しばらくして、

「君はだれ？なんという名前なの？」

、眠る彼に突然聞かれた。

びっくりしてそちらを見やると彼はまだ眠っている。寝言だったらしいが、名前を尋ねられた事に喜びを感じたすみれには、彼をそのまま放って置くことができなくなる。

そこで、その時着ていた、自分色のお気に入りのカーディガンを彼にかけて図書室を後にした。

あの時、彼が起きるまで待っていれば良かった。急ぎの用事など無かったのだから。

日に焼けた人懐こい寝顔を見せてくれた彼なら、すみれの学園での最初の友達になってくれたのかもしれない。

第8話 意地

最近の宙太には悩みが一つあった。

向日葵の予言どおり出たのである、何がかと言つと電車に痴女がはつきりとは触つてこないが多分そうだと思う。

その日も宙太は向日葵と一緒に満員電車に押し込まれていた。一緒に押し込まれた向日葵は向かい合わせにぴったり重なった状態になる。

「い、ごめんね、宙太」

目の前の向日葵は居心地悪そうに謝っている。お互いにわざとではない。そして満員電車に個人の思惑は通じない。

「いいよ、こんなに混んでいるんだから仕方ない」
「うん、そうだね」

そのようにお互いに声を掛け合っていた。向日葵の柔らかい場所を押し当てられても、宙太はよこしまな気持ちを抱かないようにあらぬ方を向き、半ば瞑想状態に入ろうとしている。

押し当てられた部分がどこであるとか、その中でも特別なあの部分はこの辺りかとか、厚手のガクランが恨めしいなどとはもちろん思っていないかった。たぶん。

男らしく、その昔。男たるものかつこよくあるべし。男らしく、その昔、男たるもの……

宙太はその日、その時ごとに内容がまったく異なる、男三原則を

捻り出しつつ、心の中にある天秤を揺らしていた。

「！」

宙太はその時、お尻に当たる違和感に気付いた。何かがお尻の表面を移動している。と、思ったらすぐに退けられた。勘違いか？

しかし、今日で3日連続だ、勘違いでもないだろう。それに今日ははっきりと揉まれた気がする。向日葵の手ではない、向日葵の手は片方はカバン、片方は宙太と向日葵に挟まれている。

確認しようと思って身をよじるが、見える範囲では分からない。それと、すでに触られていないので確認のしようが無い。

（「ちよつと、宙太」）

向日葵に小声で注意されてしまった。向日葵とはぴったり重なった状態で、背の高さもほとんど変わらない。そんな時にびっくりした時の耳元の荒い息と確認するために身をよじる動きは向日葵に誤解されてもしょうがない。

（「後で」）

囁き返すが、向日葵は真っ赤になってしまった。さらに誤解されたかもしれない。そう考えたたん、今の互いの体勢が気になって仕方が無い。さらに、瞑想が解けたら血の巡りがよくなってしまった。

電車が駅に付くまでの間、宙太は自分が痴漢に間違えられないように自分自身と戦った。戦いの結末は微妙な結果になった。

“後で”説明しなくては。

向日葵^{ひまわり}には駅を出て学園に向いながら説明しておいた。

「やっぱり、痴女に触られたんだね。私の言った通りになったね」
「いや、まだ痴女だって決まったわけじゃないから」

宙太^{そじた}は向日葵^{ひまわり}の得意げな様子に、認めたら負けた気がして反論した。

「そんなわけ無いでしょ。明日から男性専用車両に乗りなよ」

「え、それも負けた気がする」

「何と戦っているのよ……」

もちろん、自分自身とだ。それにお尻を触られたとしても何とも思わない。それを向日葵^{ひまわり}に言つと。

「お婿にいけなくなるわよ」

と、言われてしまった。

第9話 檻

その日、宙太そらたはすみれの姿を見ようと2組にやって来た。

体育の授業で仲良くなった2組の男子と、教室の前の方の席でお弁当を食べるすみれを見ながら話を聞く。

「ずいぶん綺麗な人だね」

「ああ、同じクラスで毎日会っているけど、その度に気後れしちゃうほどだよ」

間近で見るとすみれは本当に綺麗だ。顔のパーツは完璧に整い、テレビで見るとどんな女優より美人で、滑らかな白磁のようなその肌には一点の曇りも見当たらない。

「ご飯を食べる姿勢も仕草も優雅で隙が無い。」

「なんか、お嬢様って気がするけど、そうなの？」

「ああ、彼女は・・・」

話によるとすみれの家は代々続く、いわゆる旧家で中学までは李すももの通っている名門私立中学に通っていたらしい。なぜ藤学に来たのだらう？そのあたりは知らないという。

すみれは完璧だ。完璧に見える。

しかし、宙太そらたには以前見たすみれの方に心惹かれるものを感じる。今のすみれにはあの時感じた何かが足りない気がする。

「彼女はなんで一人で食べてるの？」

最後に聞いてみた。一人でご飯を食べる完璧なその姿は既に現実感を失っている。まるで人形のようなようだ。

「類は友を呼ぶって言うだろ、あんなに美人だと彼女と類を同じくする人がいないんじゃないかな？」

その言葉にも、再び宙太は素直にうなずけない何かを感じた。

「すみれ先輩は藤学に居るんですか」

夕食後、居間のソファで並んでくつろいでいる時、李にすみれのことを聞いてみた。

「すみれ先輩は撫子会の前会長で、優しくて、朗らかで、私もお世話になったことがあります」

すみれのことを話すその顔はうつとりしていて、宙太は李の性的嗜好が心配になるが、女子校の憧れはこんな物かもしれない。まずは他に気になった事を聞いてみた。

「撫子会って何？」

「撫子会は良き母、良き妻を目指す部活で、全学年共通の授業である“撫子たる為に”の指南役でもあります」

詳しく聞くと、李の学校ではその授業の中で華道、茶道、日本舞踊、書道などをほんの触りだけではあるが全員体験する。撫子会はそれを教える側で、撫子会の方は普段の部活で指導役の先生にそれを習っている。ということだった。

李はその時にすみれに花の生け方を習ったらしい。

今日見た、孤独な様子のすみれの話をする。

「そんなはず無いです。すみれ先輩はみんなの憧れの的だったんです。」

急に立ち上がり宙太に食って掛かるが、事実だと分かると、今度は心配そうな顔になる。

そんな李の様子に若干引き気味の宙太は、李ちゃんはやはり女の子が好きなのか？と考えていた。

しばらくの後、李の顔つきが引き締まり、言った。

「わかりました、宙太お兄様。李はお兄様に以前約束していただいた“お願い”を使うことにします」

“お願い”とは以前、李の携帯に宙太の半裸の姿を写真に取られたとき、データを消してもらった代わりにしたものだろう。

覚えていたのか李ちゃん、そこまで無念そうな顔しなくても良いよ。

「お兄様はすみれ先輩を元の明るい先輩にしてあげてください」

「えっと、本気？」

「本気です。本当ならもっと大事なところで使いたかったのですが、すみれ先輩の為なら仕方ありません。」

それでも、宙太が乗り気でない様子なのを見て取ると。

「男らしくないですよ、お兄様」

「がんばるよ、李ちゃん。大船に乗った気でどんと任せてくれ」

宙太は即答する。

その言葉に李はやっと笑顔を見せてくれるが、その笑顔もすぐに曇り、「ああ、お兄様とのデートが・・・」、「キスして貰っても・・・」、「それどころか李の初めてを・・・」等、つぶやいているが良く聞こえない。

呟く内容には不穏なものを感じるが、憧れの先輩のために“お願い”を諦めた李にご褒美を上げたくなった。

「大事な先輩なんだね。よし、妹分の恩は兄貴分の俺が返すよ。だから李ちゃんはお願いを使わなくても良いよ」

手を伸ばし、思わず李の頭をなでながら言う。少し子ども扱いかもしれない、と考えるが、

「ありがとうございます。宙太お兄様大好き」

李の飛び切りの笑顔に、兄貴分として良い事をしたと思っていると李に抱き付かれてしまった。

よしよし、普段はクールだけど可愛いところあるなと思い、さらに優しく頭をなでてあげる。

すると、抱きつく体勢から今度は太ももに座り、お姫様抱っこの姿勢で頬を首筋に擦り付けられる。

あれ？良いことしてるんだよね、俺。

さらにスキンシップを求める李と消極的に逃げる宙太の攻防は向日葵が止めに入るまで続いた。

次の日

「ちょっと、宙君。首元が赤くなってるよ。」

なぜか茜あかねが怒あっていた。

李すももちゃん、いつの間まに！、そして茜あかねはなぜ怒ある？
宙太そいたには不思議ふしぎだった。

番外編 茜が見た宙太

私が初めて宙太君に会ったのは、私達が藤学に入学する直前、3月の終わりの頃でした。

宙太君は私の小学生の頃からの親友、向日葵のいとこで、彼の話は以前から向日葵に聞いていました。

中学に入ってから向日葵は、私が学校の気になる男の子の話をして余り乗ってこない。何故かと聞いても宙太の方がかつこいと言われるばかりで、私は宙太君が段々と気になってきていました。

初めて会った宙太君はぼさぼさの髪に野暮ったい部屋着でしたが、稀に見る美少年で笑顔と頬に浮かぶえくぼが魅力的で、男の子のえくぼが大好きな私は、思わず触ろうとして向日葵に止められる始末です。

あと、向日葵が彼を大絶賛する理由も分かりました。向日葵本人は余り気が付いていないようですが、向日葵の好みは瞳の綺麗な男の子です。ぱっちり開いた目、真っ黒で大き目の黒目、健康的な白目は向日葵の理想なのでしょう。それは向日葵自身の瞳に良く似ているのだけけどね。

私の年の離れたお兄ちゃんは、色白で穏やかな優しい人ですが、宙太君は健康的な日焼けで爽やかな笑顔、えくぼ付きの美少年でこんな兄弟が欲しかったと思わせます。お兄ちゃんも好きですが、向日葵がうらやましいです。

そこで、呼び方を宙君にすることにしたら、お互いの呼び名はお互

いの距離感を言葉にしたものだと思うから、これで仲良くなれると良いな。

宙太君に初めて会った学校の女子達は、やはり気になって仕方が無い様子です。私も負けて入れられません。とはいっても放課後は部活があるのであんまり会えないのが残念です。

宙君、この間、教材を運ぶのを手伝ってくれてありがとう、重かったから助かったよ。部活のランニング中に「がんばれ」って言うてくれてありがとう、嬉しかったよ。

男らしいことを目指しているみたいだけど、今の宙君も十分に男らしいよ。

でも宙君、いつも私の胸をちらっと見るのはどうして？気になるのは大きいから？それとも私のだから？

確かめるためにも少し大胆に迫ってみただけど、私の方が恥ずかしくなっちゃったよ。

でも、照れた顔も可愛いね。ますます好きになりました。

でも一言言わせてください、何よそのキスマーク！

ライバルは多いみたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3774y/>

子羊は僕で、あの子は狼

2011年12月11日17時48分発行